

WOD~森の復活~

asitaba@ねこ

そこには森がありました
その森には透明な水が流れ、木々が盛んで
さまざまな生物が棲んでいました
.....ですが、今はどうでしょう
水は生活汚染で泥水に、
たくさんの木々は、人間達の手で次々と切られ
とても生物が棲めるような環境ではありません
そのせいで動物達は
そそくさとこの森をあとにしていきました
しかしそんな森にもまだ残っている動物達がありました
ですが一番始めにいた15匹よりだいぶ減っています
それというのも今はもう在りし日の10分の1、
ほんの15匹しかいないのです
ある日、この残っている15匹で
どうにかこの森を元に戻せないかと考えていました
すると西の方からある1匹のりすが歩いてきました
そのりすは、昔この森にすんでいたピックルという
いわゆる"旅りす"でした
ピックルは前とは全然違う風景にびっくりしていたようで
しばらくの間森の中を歩き回っていました
ピックルは、今までのことをみんなに聞いた後、
森の復活に協力する、と言ってくれました
これで、ピックルという心強い助っ人が入り
あわせて16匹になりました

そのとき、ピックルは何かを思い出しました
この森には三人の神様が居るといのです
しかしそれもずっと昔の話で今では"伝説"とされているそうなのです
そのため誰一人として信じるものは居ませんでした
ですが今となってはこのありさま.....

神様にでも仏様にでも縋りたい気持ちで一杯でした。
三人の神様とは「木」「生」「水」の三種の精霊のことです
しかしその精霊達はこの世に無い程意地が悪いそうで
見つけることすらもままならないらしいというのに
その神様がお願いを聞いてくれるかも定かではありません
最初そんな噂話を信じるのはピックルしか居ませんでした
仕方がないので、ピックルは

「やる気が無いのならやらなければいい
いっその森から出ていったらどうだ？
この森は近いうちに無くなるだろうから」
と、脅すように言い放ちました。

それを聴いた15匹の中でたった1匹のしまりすが
立ち上がりました。

しまりすはみんなを励ますように説得し始めました

「出来ないことはない
やらなければ出来ることも出来なくなってしまうだろ
一回ピックルの言うことを聞いてみよう
それで駄目なら他の手を考えればいい」
その言動に心動かされた3匹のはりねずみと
2匹のゆきうさぎがピックルの後ろに座りました
残りの3匹のきつねと2匹のふくろうと3匹のやまねこは
まだ立ったまま迷っています
すると、ピックルは残っているものへ
追い打ちをかけるように鋭く睨み付けました
それでピックルが怖くなったのか
残りの8匹は怯えながらこっちに向かってきました

ピックルとその仲間達は
その三人の神様を手分けして探すことにしました
ですが一時間、二時間……
半日丸々経とうという頃になっても見つかる気配すらありません。
あたりは暗くなりもう探すのは危険と感じたピックルは
みんなを帰して、また明日探すことにしました
次の日の午後……
まだ見つからなくてみんなが諦めかけた時でした
ずっと向こうの奥洞窟に、六つの小さな光が見えました
左から、茶、緑、青……
その三色はまさしく三人の神様達の目の色でした。
ピックルたちがこれを見つけた瞬間
今までの疲れが嘘のように消えていきました
みんなにも伝えると、跳ね上がったり、駆けずり回ったりと元気になり、
体の底からどンドン力がみなぎってくるようでした
奥洞窟にみんなで辿り着くと、森林を守る神様だと思われる
茶色い目をした神様にお話ししました
「私たちの森を助けてください。」
そうすると一瞬弾けるような
目眩に襲われ、知らない場所に飛ばされたのです

みんなが茫然と立ち尽くしていると

青色の目をした神様がこう言いました

「ここはあなた達の棲む森です、それも1200年もむかしの」

「1200年?!」

驚きました

こんなに美しい森は初めてです

水も空気も澄み渡っていて

何せそれが1200年前のこの森だということですから

「このような森に戻すにはどうすれば良いのですか」

ピックルが問い掛けました

「今の森から元の森に戻すには時間も労力も足りなすぎます」

「それじゃあ私たちはこれで……」

ピックルをはじめ

あとの動物達も肩を落としました

今まで頑張ってきたのに、と

ピックルは、次の日の朝

ひとりでまたあの神様を探しに行きました。

ピックルがひとり

森の中を歩いているときのことで

目の前に虫たちの集団がやってきました

「お前がピックルか？」

カマキリがピックルに問いかけました

「そうだが」

ピックルが無愛想に答えました

「神様を探していると森のものから聞いてきた

私たちについてくれば居場所がわかる」

カマキリの近くにいたアリが言います

本当かと、少し考えたピックルは

「わかった、任せるよ」

アリたちはピックルを後ろに従えて

神様がいるという場所へと歩いて行きました

「ここだよ、ここに神様がいるんだ」

アリが連れてきてくれた場所は

昨日の奥洞窟……

「昨日ここで神様に逢ったんだが

時間も労力も足りないと言われて……」

「あんなきれいにするには時間が足りないだろうけれど

出て行った仲間たちが戻って来てくれるようにするのなら

今からでも遅くはないんじゃないかと思ってね……

もう一度頼んでみてくれないかな」

カマキリがピックルにお願いしました

いくら集団でも、虫たちでは声が小さすぎて届かないのです

なのでここではピックルしか神様にお話しすることができないのです

「……もう一度頼んでみるよ」

ピックルは待ちました

……神様がやってくるのを。

—ものすごく空は暗くなりました
ですがまだ神様はやってきません……
神様は来ないのでしょうか。
虫たちはずいぶん前に仲間のもとへ帰りました
今はピックルひとりです
森のためなら……とピックルは待ちました
「……ピックル……ピックル……」
どこかからか声が聞こえます
ピックルの名前を呼んでいるようです
「誰だい？」
ピックルは大きな声で返しました
「……ピックル……こっちへ……こっちへ……」
ピックルは少し気が引けましたが
何度も呼ぶので仕方なく行きました
囁くような声が聞こえたほうへ向かうと
そこには昨日の神様がいました
茶、緑、青……確かにあの神様です
「ピックル、ピックルの森を思う気持ちがよくわかりました」
緑色の目をした神様がピックルに言います
「ピックル、私たちに出来ることはほんのわずか
あとのことは森の仲間たちと協力してもとの森に近付けてください」
ピックルは一言もしゃべれませんでした
「……頼みましたよ。」
青色の目をした神様が言いました
茶色の目をした神様がピックルに向かい微笑みかけます
「あなたならきっと出来ます、私たちはあなたを信じます」
そういうと同時に神様たちは消えました

ピックルはしばらく立ちつくし
神様の言ったことを頭の中で繰り返しました
「森が元に戻るのか……」
そう考えるとピックルはいてもたってもいられず
15匹の仲間たちが待つところへ駆けて行きました
「本当かピックル!」
まだ朝焼けが上ったばかりなのに
そのことを聞いて飛び起きるみんながいました
ピックルが来るまではあまり乗り気ではなかったけれど
この森に残った仲間たち……
心からこの森を愛していたのです
「神様は少しでも協力してくれている
あとはみんなでこの森を守りぬくしかないんだ」
みんなの結束はますます高まります
その日の天気は快晴でした
それからというものの森の仲間たちはだんだんと増えていきます
それに伴ってきれいになっていく森の水
切られた木は根を張りすくすくと育ち始めました
すぐ隣の森から花の種が贈られ
何もなかった土の上一面がお花畑へと変わりました
その時も神様はずっと見ていました
ピックルの活躍でここまでなるとは神様も思っていなかったのでしょう
少々驚いた様子で微笑み、いつまでも見守り続けました。